
勇者なんてお断りだ！

優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者なんてお断りだ！

【Zマーク】

Z2020X

【作者名】

優太

【あらすじ】

俺こと黒瀬軍司は、幼馴染みにして親友の柊春樹と、そいつの彼女である九重晴と共に、平和な日常を送っていた。そう、あんな事件があるまでは

プロローグ（前書き）

この作品は、物語が進むにつれて残酷な描写、性的な描写が増えていきます（主に流血表現）。

なお、登場人物の皆が間一髪で助かるという保証もありません。

そういうた描写、物語の苦手な方は、拙作を読まないことをおすすめします。

プロローグ

夕暮れ時、坂道を上る、三人の人影。少年一人に少女一人。彼らはちょうど遊びに行つた帰りで、この内真ん中に立つてゐる長めの金髪の男子の家に向かう途中だ。

「んで俺は言つたわけよ。『向こう百年、恋人保証付きだ』ってな

「はーいはーい、ごつつかさん」

「もー、恥ずかしいからやめてよお」

黒い短髪の男子が呆れ氣味に、茶髪のセミロングの女子が恥ずかしそうに顔を俯かせて、それぞれ言葉を返す。よく見れば、金髪の彼と茶髪の彼女は手を繋いで歩いている。

「春樹ののろけ話は話の構成がうますぎて、胸焼け起しそうなんだよ。あー、これについての反論は要らん」

「んー、けどやっぱ、お前も彼女できればわかるぞ? ほんとに好きな相手なら、自慢したくてたまんねえから」

「さあ、年齢イコール彼女いない歴の俺には、さっぱりだ」

「それが顔が悪いからじゃなくて、単に女に興味がないからってのが、なんとも悲しいな」

そう言われた黒髪の彼は、確かに容姿は悪くない。背は百八十七センチの長身で、無駄のない引き締まつた筋肉と、落ち着いた雰囲気を見せるクールな顔立ち。ともすれば、若くして百戦錬磨の風合いすら醸し出す彼は、どちらかと言わざともモテる方だ。

対する春樹と呼ばれた少年は、身長百七十五センチ、体格はひょろりと細く、目は常に好奇心に満ちたような輝きを持ち、笑顔の似合ひ、というより常に笑顔。ピアスを右耳の耳たぶに一つ、左耳の耳たぶに一つと軟骨に一つ空けており、着崩した麻のシャツが癩に触らないほど着こなしている。いわゆるチャラいと言う部類に入るがやつだが、ムカつかないどころか、そつするのもアホらしいほどのイケメンだ。

「だよねー。こんなイケメン一人のそばにいたら、私見た目フツーだから恨まれるよ」

「なあに言つてんだよ。晴は十一分に可愛いから、嫉妬するのもアホらしいだろうよ。な、軍侍」

「まあ、確かに。普通に可愛いの部類に入るだろ?」

そう言われた彼女 晴は、確かに可愛い。身長は百六十センチほど、体格は少し細め。ぱっちり開いた大きな一重、しかし顔のパーツは小さく、小動物的愛嬌を感じる。胸は大きくもなく小さすぎず、女性的な体格になっている。この、完璧すぎない可愛さが実は女子にも人気があり、彼女と付き合っている春樹は、実は男より女の嫉妬の目が痛かつたりする。

「そういえばよ、春樹。件の小説はどうなった?」

「ん? あー、あれね。いや実はさ、異世界に飛ぶときこう飛ばすかで迷つたつきり、まったく進まねえんだ」

「それ、進んでないってことじやん」

「晴う? そーゆーのは言つちやダメなんだよ?」

「ま、九重^{ここのえ}が言わなくとも俺が言つたがな」

「四面楚歌!?」

「「それは違う」

両サイドからないないと手を振られながら、がっくり肩を落とす春樹。そうやつて他愛もない話をしながら帰路につく、はずだった。不意に、眼前に黒い球体が現れる。効果音をつけるなら、もわつと言つ感じで。

「おい、春樹」

「ああ、こいつはやべえ」

「え、何、何? これ何?」

「こいつは、ネタとしていただき!」

「そっちかい!」

ガシツ、とガツツポーズを決めた春樹に、軍侍が目敏く突つ込み

を入れる。

「まあ、やべえ展開なのは確かやね」

「とにかく、逃げるぞ」

といつて振り向いた軍侍は、驚愕する。

「道が……ない」

軍侍に遅れて振り返った一人もまた、絶句していた。不意に、何かを背後に感じ取った軍侍が振り向く。

「みんな、横に飛

軍侍の警告を搔き消し、キュオン、と間の抜けた音を最後に、彼らは氣を失った。

第一話 勇者なんてお断りだ！

なんだ、」ヒ。

……次元と次元の境界線、妾たちは狭間の世界と呼んである。

あいつらはどうなった？

……案するでない。あの者たちも今ごろ、妾の仲間と話しておる。ほう、しかし貴殿らは、どうにも強い精霊と巡り会う運命が共通するらしい。

精霊？

……ああ。まだ名乗つていなかつたのう。妾は蓮姫。れんひめ火を司る精霊じや。妾の力、貸してやろうぞ、黒瀬軍くろせぐん侍

まあ、厄介事さえ引き込まねえなら好きにしやがれ

……ふむ、なんとも豪傑な。ではまた、後程。存分に親睦を深めようではないか。

クスリ、と少女の笑い声が聞こえ、気配が遠ざかる。それと同時に、軍侍は浮わついた意識をしつかりと掴み取り、目を開けた。寝ていると氣づき、腹筋だけで体全体を持ち上げて重心を顔の両サイドについた手に移し、さながらバック転するように起き上がった。まず皿に飛び込んできたのは、ひと、ヒト、人の群れ。ざわついた雰囲気が自分一点に浴びせられ、どうにも居心地が悪い。

「春樹」

「おうよ

彼ひ 杓春樹ひこじゅもまた、手をつくところまでは同じで、そこから腕

力と勢いで飛び上がって立ち上がる。

「晴、起きな」

周囲の警戒を軍侍に預け、春樹は未だ寝ている睛を起こしにかかる。

「んう～……春樹？」

「せり、起きなよ。こんなとこで寝てたら体痛めるわ」

「うん」

そう言つて、かなり無警戒にムクツと上体を起こす晴。田を擦りながら前を見ると、ずっとぞわつてている群衆に田が止まる。

「あれ誰？」

かなりゆつべじした口調で、群衆を指差す晴に、春樹はあと首を捻つた。

「ようこやお出でくださいまし」

「「よくもまあいけしゃあしゃあとよつこそなんて言えたなあおい」

「

「ひつひ

軍侍と春樹、二人の殺氣のこもつた速攻の反論に、落ち着いた笑みを浮かべていた、白いローブを着た少女が縮み上がる。

「俺らは来たくて来たわけじゃないし、」

「できることならすぐにでも帰りてえ」

「そこをようこそと言つのはな」

「「例え神が許そうとも、俺ら一人が許さねえ」」

息の合ひすぎた、まるでリハでもしたのではないかと囁つ「コンビネーション」に、白ローブだけでなく、群衆すらおののく。が、第三者の介入により、一人は、警戒は解かないまでも殺氣は抑えることができた。

「まあまあ、皆様。落ち着いてください。急にこちらの世界に召喚してしまったことについては、深くお詫び申し上げます」

言つて、これまた白いローブを着た、三十代くらいの大人の色気とでも言わんばかりのナイスプロポーションの女性が、深々と頭を下げる。

「しかし、我々にも事情があつての急な召喚でござります。我々の世界は今、魔王に侵略されつづります。我々は幾度なく立ち向かいましたが、魔王の配下にすら、辛うじて互角に戦えても、追い返すのがやつとです。そんな折、とある文献から、異世界から呼び込

んだものには特別な、聖なる力が宿ると書かれて記述を発見いたしました

た

「つまり、俺たちに勇者をやれと？」

「はい、そのと

」「だが断る」

軍侍が質問したにも関わらず、軍侍、そして春樹の断固拒否し、
流石に大人の白ローブも睡然とした。しかし、ほんの一瞬だけ。こ
ほん、と咳払いをし、気を取り直す。

「では、そちらの女性の方は

「私勇者とかって柄じゃないんで。てか、自分達のことぐらい自分
達で処理してくださいよ」

「あー、晴？ それは流石に言い過ぎでない？」

「だつてそうじやん。話の流れからして、ここつて異世界でしょ？
異世界の人間がどうなううと て言つたが、春樹以外どうなつて
も別にいいし」

立ち上がり、身長的側面で見てやむを得ないが、上目使いにそん
なことをさらりと言つてのけた晴を、唐突に春樹が抱き締めた（！
？）。

「晴、俺も

「はーいストップ。そんな状況じゃないね」

軍侍の冷静な突つ込みに、拗ねながらも体を離す春樹。そして晴
に背を向けて白ローブたちを見る頃には、先までの冷めた目線があ
つた。

「けどまあ、軍侍。多分こいつら、俺らが魔王倒すか、俺らが死ぬ
かで用なしになるまで、使い続けるのは確かだぜ？」

「ああ。だからどうするか決めかねてるのさ。ここにいるのは、全
員勇者なんて偽善者にはなれない。かといって、断るのも、できそ
うにない。さて、どうしたものかな」

そこまで言つて隣を見ると、ふくくと笑う春樹がいた。

「どうした？」

「お前、よくこんな状況楽しめるな。軍侍が饒舌にならぬとされ、決まって楽しんでるときだ」
「は？ こんな状況……楽しまずにいれるかよ」
「だな。ま、一つ結論付けるとしたら、」
アイコンタクトをし、頷き合つ一人。
「勇者なんてお断りだ！」

第一話 勇者なんてお断りだ！（後書き）

一週間単位で一話づつ公開する予定です。
まあ、二週間くらい空いたら作者が樹海へ修行に逝ったんだひとつと思つてやつてください

第一話 豪腕の黒瀬、柔脚の柊

「うぬら、本当に勇者を断ると誓つのか」

「だーかーらー、さつきから誓つてんじやん。勇者なんてもんは俺らには向かねえし、俺や晴に至つてはそいらの訓練兵より使えないつて」

「それなら、鍛えればよい」

「めんどくせえよ」

「まあそうでなくとも、春樹は魔王なんかと真っ向から殺り合おうつて質じやないだろうな」

「勝てない戦はしない主義、てかあ、平和主義者なんで」「どの口が言つてんのよ」

バカ、と付け足して春樹の腕をペシッと軽く叩く晴。

ここは、謁見の間。玉座のあるステージには、まず玉座に、中世ヨーロッパの身分の高い貴族の着るよつな、派手な服装をした王らしき人物。向かって右側に、腰に剣を携えた、甲冑姿の若い男性が立つてゐる。そして広間の側には、左右この広いスペースを埋め尽くさん限りの、人だらけ。貴族がいれば騎士もいる、文人もいて、どうやら魔術師らしき集団も見える。

「まあその話はどうでもいい。が、魔王を倒すには、勇者の肩書きが必要なのかな?」

「おい軍侍、お前まさか

「春樹、お前は黙つてろ」

「必要、とは言わん。ただ、魔王討伐と勇者の存在は、伝承で語られるほど我が国、否世界中の人の意識に根強くあるのは確か」「ほう、ならこいつしたらどうだ。異世界から呼んだのは勇者ではなく豪傑たる武将で、そいつが協力してくれる、というものだ。これなら俺らは、勇者ではなくなる」

「軍侍! それじゃあ魔王討伐は受け付けてことかよ!」

「いや、お前は好きにしろ。強要もしない」

「少し、考える」

「そうか。ところで王よ、この提案、呑むか、呑まないか。決める」「勇者ではないにしろ、協力はしてくれるか。それだけでも、十二分に有り難い。のだが……」

「じゃあさ、勇者の影武者作るつてのは?」

「「「それいし!」」」

あまりに奇妙な、男性のみの三重奏が晴に向けられる。

「それなら俺や軍侍が勇者にならずにすむし、影武者 影勇者も、一瞬とはいえない気になれる。変な意味で一石二鳥じゃねえか!

さつすが我が愛しの晴」

言つて抱き締めようとした春樹を、晴はするりと躱す。その先で彼がいじけたのは、言つまでもない。

「しかし影武者を立てるにしても、誰がするか、といつ」」」」」」

沈黙が流れる。勇者とは、民の憧れ、国の絶対的戦力、魔王最大のライバルである。そんな役を、例え影武者とはいえ、誰が引き受けれるのか。そこに、拳手するものが一人いた。

「偽物なら、やりますよ?」

「晴?」「九重?」

「だつて影武者なら、大して重荷じゃないし。それに演じるだけなら、私得意だから」

「や、晴がそんなことする必要ねえよ。晴がするぐらーなら俺が全

部背負つて」

「だーめつ。春樹は、黒瀬くんと一緒にに行かなきや。春樹が喧嘩強いの、私知ってるんだから」

「剛腕の黒瀬、柔脚の柊、か」

昔の二人の通り名を、軍侍がポツリと呟く。それは、畏怖と尊敬から付けられた通り名。そして、彼らが表舞台に立つことをやめた、通り名。

「だから、私がやるの。嫌何て言わさないから」

「晴……」

「一人は、これで納得か？」

「異論はない」

「……晴がいって言つない。」

とりあえず、凝りは残るものとの場は収まる。すると次は、勇者に授けられる武具の問題　とは言え「こは王面のようだから、心配ないだろう。

その予測を裏付けるように、三人は数人の騎士によりどこかへ案内された。

（案内件護衛にかまかけた監視か……。気に食わんが、まあ俺でもそつしたか）

そこは、武器庫と言つ名田の下にある宝物庫だった。どの武器を見ても細かな金銀細工はもちろん、色とりどり、煌びやかな宝石のよつなものが嵌め込まれてゐるのがほとんどだ。

「豪華、否豪奢と言つべきか」

「俺ら三人にはとても合わねえなあ」

「私もシンプルな方がよかつたあ」

「す、すべてこのように飾りすぎているわけではありませんので、お手数ですがお眼鏡に叶うものをお選びください」

監視について来た騎士の中のリーダーらしき人物が勇者（仮）を前に緊張したのか、おずおずと言つた感じに促す。

「まあ、見るだけの価値はあるか」

軍侍の言葉に一人は頷き、中に入る。軍侍がまず目をつけたのは、異様な扱いを受けた防具だ。ここにある鎧はどれを取つても一式で揃つてゐる。しかしそれは棚の上に、ただ忽然とそれだけで置いてあつた。それは言つなれば、ただの籠手。肘まで届く普遍的構造と、手の甲を軽く覆つただけの、どちらかと言えば服の下に隠してつけるようなものだ。王は彼らに「勇者のために設けた武器庫だ」と言

うから、重厚なものしかないと思つたが、そうでもないようだ。色も黒く、隠匿性の高さから軍侍の趣向にピストライクだ。彼は迷わず、今着ている黒に少しだけプリントがなされた長袖のシャツの袖をまくり、それを装着する。

「うん、悪くない」

そう言つて、彼は左に目を向ける。それは武器庫の奥。たまたま顔を向けただけだ。しかし彼は、衝撃的なまでに彼を魅了する武器を見つけた。

日本刀。それがこの系統の武器に与えられる総称だ。軍侍は近づいて手に取り、鞘からその刀を抜き出した。そこに現れたのは、闇を飲み込まんとするほど輝きを放つ白刃で、直刃。そして、竜が彫り込まれている。一見派手な装飾品に見えなくもないが、その刃の鋭さ、刀の重量は間違いなく実戦用。それに気づき、軍侍は目を見張る。

「名刀とは、外見と性能とが優れているとは聞くが……これは、儀礼用ともとれる美しさの反面、確実に対象を殺す獰猛さがある。むしろ、怖いくらいだな」

軍侍は言つて、鞘に刀を納める。そしてそれを、腰のベルトに刺す。黒いジーンズに日本刀の組み合わせは、一見ミスマッチのようで、以外と合う。あるいは、軍侍の風格があるからこそなせる技か。

「よし、これにしよう」

「軍侍、遅かったな」

彼が武器庫を出た頃には、春樹も晴も武具の選択を終えていた。春樹の外見の目立つた特徴は、その腰にレイピアが刺さっていることだ。対する晴は、白いローブを羽織、その手には真っ直ぐな銀の棒が握られている。

「それでは皆様、武器の選定も終わられたようですし、本日はお疲れでしおからお部屋へ案内させていただきます」

いつの間に來ていたのだろう。メイドが四人、彼らを出迎えた。

それを確認した騎士達は、彼女らが信頼できると思っているのだろう、先のリーダーが、黒い服のメイドの中で唯一淡い紫のメイド服を着た彼女に一礼してその場を去る。どうやら並みの騎士を遙かに凌ぐ権力者か、メイドと言う身分に縛られず尊敬される女性らしい。齡30だろうか、軍侍ならともかくとして、春樹はそこを目敏く感じとる。しかし肌の若さは、現役女子高生で、そうでなくとも幼く見える晴と遜色ない。代わりに冷静を感じさせる鋭い目とスッと通つた鼻筋が、彼女を一気に大人の女性に押し上げる。

「メイド長、サラウイス・レイホールです。以後お見知りおきくださいませ」

言つて、優雅に一礼する。彼女が、彼ら三人がこの世界に来て最初に名前を知つたものだ。そして同時に彼らの最大の協力者になることを、彼らはまだ知らない。

第二話別れ、そして、旅立ち（前編）

三人は、一人一部屋を宛がわれた。しかし彼らは今、軍侍の部屋に集まっている。三人の部屋は並んでいたのだが、真ん中が軍侍の部屋だったのと、春樹の頼みで集まつたのだ。盗聴されていないことを確かめた軍侍と春樹は、テーブルへ戻る。軍侍が晴の対面へ座り、春樹は晴のとなりに、人一人分の間を空けて座つた。普通ならあり得ない行動に、軍侍が少し驚く。彼らは、いつ見ても手を繋ぎ、人目も憚らず密着する。それが、これだけのスペースが空けば、やはり不自然だつた。

「さあ……話をしようか」

いつものへラへラした笑みを消し、神妙な面持ちで切り出す春樹。「といつても、俺はこれをもはや事後報告と同じ扱いで話すけどな」「なにか、考えがあるの？ それなら私も」

「晴は！ 晴は、ダメだ。影勇者の件もあるけど、それを差し引いても危ない」

晴の言葉を遮つてまで、春樹は彼女の意見を取り消す。それも、珍しい。彼ら二人はバカがつくほどのカッブルだが、依存し合つているだけというわけではない。互いを尊敬し、尊重し、重宝し、そして、依存もしているのだろう。だからこそ、春樹の言動は目に見えておかしかつた。しかし軍侍はこれで、ようやく春樹の考えを掴みかけてきた。それは、軍侍も考えたこと。

「お前、この城から逃げ出すのか？」

しかし春樹はブンブンと頭ん左右に振る。

「逃げ出すんじゃない。抜け出すのさ。そして軍侍とは別のルートで、魔王にたどり着く。俺はなにも全てを投げ出すわけじゃない。あえて言うなら、勇者稼業から完全に離れるだけさ」

「けど、それじゃ春樹、一人で行動するの？」

「ああ。晴には、辛い思いさせるよな。ごめん」

「また、遠くなっちゃうの？」

言つて擦り寄ろうとする晴を、春樹は彼女の肩を持つて制した。

「今夜にはもう発つ。それを考慮した装備も、手に入れたんだ」

「それを考慮したって、お前。あそこにあるものは全部特殊能力付きだつてのか？」

「多分な。装備を自分のものだと決めた瞬間から、明らかに体や考えに違和感があつたからな」

春樹は今でこそ感情豊かで人との付き合いを大事にする。しかし昔は、信頼するものとしか関わらず、閉鎖的だつた。そんな彼がうまく人の世を渡り歩いたのは、自分自身、そして近辺の変化に敏いところがあつたからだ。そんな彼が言うのだ。信頼はできる。

しかし、今の問題はそこではなかつた。

「まあそれはいいとして……九重はどうするつもりだ

「お前に任せる

「は？

「晴を、守つてくれ。多分これは、地球でも、こっちでも変わらねえ」

絶対的信頼の証。自分の愛するものを、自分以外のものに守れと言つことは、想像を絶するほどに難しい。彼もできるなら、自分で守りたい。しかし春樹は自分の役割を把握していた。

自分には、軍侍のように他を圧倒する霸気はないし、実質の勇者も、勤まらない。影勇者は、晴に止められたこともあるが、それ以前に、自分ではいつか化けの皮が剥がれかねない。武を持った軍侍、演じ、騙すことに長けた晴。自分にはどちらともない。だが、一つだけ残された道はある。それを人は卑怯と罵り、下劣と蔑む。しかし、彼にはそれができる。否、それしかできない。

それが、暗の道。必要なもの、情報を得るためなら、影で人を痛め付け、殺め、その事すらすぐに忘れられるように暗躍する。夜襲奇襲は朝飯前。それだけが、彼に残された、有用性を示す道。

「軍侍、頼んだ」

「……ああ、頼まれた」

そのやり取りを最後に、この小さな、しかし、三人の道を決める重要な会議は終結し、解散となつた。

「ごめんな、晴」

ここは、晴の部屋の前。今にも泣き出しそうな恋人を前に、春樹はなにも言えずにいた。否、言おうとはした。なにせ普段なら、言葉だけで彼女を紅潮させ、しばらくは口も聞けないほど悶絶させるのだから。しかし人間の頭と言うのは、必要なときに限つて働くかい。春樹はそんな自分の脳みそを深く呪つた。

「……ごめん」

もう一度、謝る。それしかできなかつた。

「ねえ、春樹」

声を僅かに震わせながら、晴は言つ。

「ん？」

「ウチら、一緒に帰れるよね」

ウチ。それは晴の、昔の一人称。それが出ると言つことの意味を、春樹は知つてゐる。だが、これは必ず果たせる約束ではない。帰れることを前提に話をしたとしよう。しかし春樹には、三人が笑つて帰れる姿を、なぜか想像できなかつた。思い浮かべても、自分の冷たい部分がそれを否定する。

だから彼は、答えを返す代わりに、晴の身を抱き寄せた。強く、きつく。応えるように、晴も首筋に手を回すように抱き締める。永遠にも近い沈黙が、二人を、温かく、包み込む。

二人は願つていた。このまま、時が止まればと。時間とは、離れて暮らすことになる恋人達の、最大にして最強の敵。どんな厳しい親よりも、交際を認めない親よりも、強く、無情で、抗えない。二人は、それを痛いほどよく理解していた。過去が、そうだったから。

第四話別れ、そして、旅立ち（後編）

「コンコン、と扉をノックされる。春樹はベッドに寝そべつてしていた思考を手放し、上体を起こす。

「どうだ」

音もなく開けられたドアから現れたのは、淡い紫のメイド服サラウイスだつた。

「ああ、サラウイスさん」

「サラで構いませんよ」

「じゃあ、サラさんで」

フフフ、と笑いながら音もなくドアを後ろ手に閉める。

「おくつろぎのところ申し訳ありません。緊急のお話がありましたので」

「いや、気にしないでください」

言いながら、春樹は彼女の腹を探る。が、見えない。それは隠していることすら隠しているものとは別種の、純粹で素直な心と言つ意味で。裏がないのだ。ないものを探すことはじ、無理な話はない。

「今夜、なのでしょう?」

「聞いていたんですか?」

なにが、等聞かない。そもそも夜襲に備えた護衛と言つ名前で監視役である騎士が部屋の外に立つてゐる状態で、事情を知るもののがわかる、最低限で誤解を生まない言葉で聞くのだ。少なくとも他意はない。それならば、話を進めるより他はない。

「私はただのメイドではありますよ?」

「それは多分、彼らも気づいてます。で、用件は?」

「ええ、私が直々に、お世話をさせていただこうかと思いまして」

そして近づきながら、口パクで抜け出す力添えを、と短く伝える。

正確に読み取つた彼は、どちらにも取れる返答を返す。

「ちよつとうじょうつか悩んでたんで、助かります

「ええ。では、まずこれを」

言つて、サラはベッドの縁に座り紙を取り出す。春樹も一人分の間を空け、その空間に紙を置かせた。

「なるほど」

それは、城の見取り図。ただし、一階と堀の内側のみ。ただ春樹も空を飛べるわけではない。ここからどう降りるかは別として、当然、城の土を踏みながら外に出る。そしてサラは、指先に小さな光をともす。爪の先程もない、とても小さな光だ。

「こうすれば、楽ですよ」

言いながら、地図にルートを書く。どうやら光は、紙を焦がして線を引くためのものらしい。スタートとなるのは、やはりここをまっすぐに降りたと想定したところだ。そこから裏門へ、堀づたいに進む。だが彼女は堀の行き止まりに差し掛かる少し前で進路を曲げた。堀を突き破るようにして。

（地下通路があります）

口パクで伝える。春樹が頷くと、彼女は嬉しそうに顔をほほりばせる。

「有り難う御座います、助かりました」

「いえ。では、また後程」

立ち上がり、礼をする。一瞬の隙もないその華麗な動作は称賛に値する。そして彼女は、無音の内に部屋の外へ出ていった。

晴、そして軍侍。二人は、どうにも眠れずにいた。だからこそ、二人が廊下で、否春樹の部屋の前で出くわしたのは、偶然では片を付けられない。今日がたまたまなのか、いつもそうなのか、深夜になつた今、彼らを監視するものがいなかつたのもまた、巡り合わせだらう。

「やはり心配か？」

「……うん」

「案外、寝てたりしてな」

「それは、ないとと思ひ」

「……だよな」

「コンコン、と軍侍が扉を打つてみるが、反応がない。本当に眠っているかも、と一人は期待し、一度目、今度は少し強めにノックする。やはり、返事がない。一度寝ると最低六時間は起きない男だ。もしかしたら寝ているかもしれない。しかし、同時に嫌な予感も過る。

もう、出発しているかもしれない

それは一人の共通の発想。だからこそ、軍侍は急いでドアを開けた。途端、吹き荒れる突風。それは扉の対面にある窓が開いていて、風の逃げ道がなかつたのを、急に作り出したからだろう。軍侍と晴は腕で顔を庇い、一瞬後に防御姿勢を解く。そこには、窓のわくからこちらを見つめ、しゃがみこむ とこづみりうさんに近い姿勢の 春樹を見た。

「春樹……」

「タイミングが悪いねえ」

軍侍と春樹のやり取りは、一瞬で終わる。話すことにはなにもないとでも言わんばかりに、彼は窓枠で、平然と立ち上がつたからだ。

「ねえ、春樹」

晴が彼を呼ぶ。一瞬、彼の表情が揺らぐが、すぐに張り付いたようなへラへラとした顔に戻る。

「晴……」

「行かないで!」「幸せになれよ」

晴が叫んだのと、春樹が言つたのは同時。

晴が追いかけたのと、春樹が体を後ろに倒しのと、同時。

窓枠にしがみつき、晴は下を見る。くるりと宙で回つた彼は、壁を軽く蹴つて勢いを殺しながら、着実に降りていく。遅れてやつてきた軍侍がそれを見て、驚きと興味の色を見せた。

「なるほど、落下しながら体を壁を蹴つて浮かすなど、普通はできません。これがやつの言つていたものか」

「今はそれどころじゃないでしょ！？」はやく春樹を！

「無駄だ。あいつはもう走り出した。止められん。なら残された俺らはどうする？一緒に、走ればいいだろ？そうしたらいざれ、今は違う道でも、また巡り合つ。それが、俺とあいつの縁であり、九重とあいつの縁だ」

「……春樹。うん、私、追いかける。じゃなくて、一緒に走る。見えなくとも、ずっと隣にいるから」

地を蹴つてとうとう進み出した春樹の、小さくなる背中を見つめて、晴は決意する。

影武者じゃ、影勇者じゃダメだ。私も、戦う。そうやって、魔王でも何でも倒しちゃって、また、春樹に会いたい……！

一人は、フライングすれすれのスタートダッシュをした。だがこれは勝負ではない。いずれまた再会^あうための、そして日常に戻るための、言わば三人の過酷なランニング。

魔王に勝つにはまず力。それがなければ死にするだけだ。彼らの課題は、一流以上の戦闘技術を、いかに短期間で作り上げるか。それであつた。

「いあああああ！」

甲高い声で木刀を振るつた軍侍。目の前にいた騎士の木の盾が割れ、腕を強打する。一瞬の怯み、その一瞬こそが、戦場での命を左右する。それを証明するように、軍侍の木刀が騎士の首もとに突きつけられ、わずか一ミリの間合いで止まる。

「ひい！」

尻餅をつく騎士。彼は小隊長クラスで中々の腕はあるはずなのだが、軍侍の前では、見栄も、自負も、誇りも、完膚なきまで踏みにじられて倒される。木剣（刀ではない）は刀身の部分全てがなくなり、盾は粉碎し、一瞬で首に刀を突きつけられたのだ。完敗。しかもこの実力なら、初めから一本取られていたのだ。遊ばれた挙げ句、抵抗もできずに負けた。二人の実力の差を思い知らしめる試合だった。

「ここまで！」

会場がどよめく。軍侍の相手は、曲がりなりにも小隊長。しかも指折りの実力者だ。それがこうも呆気なくやられたのでは、彼らの動搖も顎けた。

「ふん、準備運動にもならないか」

一応、礼儀として左手に剣を納めて一礼する。しかし彼の言葉は、その行動には相反する。

「もつとだ。もつと上等なやつを用意しろ」

彼が苛立ちながら言うのも、致し方ない。春樹が城から抜けて一週間。軍侍は元々剣道をしていたこと、また実戦的剣術が身に付いていることから含めて、魔法の習得の片手間に剣の復習をしている。しかし打ち合いに出される兵は、どれも軍侍の役不足。とてもお話になりはしないから、彼がこうなるのも顎けた。対する晴は、本人の強い志願により戦う術を学ぶことにした。適正から言って魔法を

専攻したのだが、彼女にはかなりぴったりだったようで、普通なら灯火をつけるだけ、微風をふかせるだけで一ヶ月はかかると言つのに、今や彼女は中級魔法までは一つのジャンルを除いてすべて扱える。

魔法のランクには、最下級、下級、中級、上級、最上級、最高等級の六階級がある。振り分けの基準としては、殺傷性の高さ、効果範囲、術の使用魔力だ。とりあえずこのことは、また後述することにしよう。

「流石はグンジ様。あのものも余裕で倒されるなんて、私ども、頼もしい限りです！」

「ああ、姫。かよつな場所にいてよろしいのか？」

軍侍に水とタオルを持ってきたのは、この国 メリフィア城塞

王国の王女、アルマリア・スルト・メリフィアだ。

「やだ、グンジ様またその口調！ 堅いからやめてくださいと言つたじゃないですか」

「しかし……」

「そうねえ。命令よ、皆と接するように私と接しなさい」

「……わかった」

「それにしてもグンジ様、連日稽古と魔法の習得に勤しむのはいいけれど、たまには休まれては？」

「いや、そもそも言つてはいられない」

「やはり、ハルキ様ですか？ 彼の判断の良し悪しは一概には決められませんが、こちらのことも学ばずに飛び出されたのでは、そんなに早く力は付けられないかと」

「それが、あいつの怖いところ。あいつは今ごろ、独学にしろ師を仰いだにしろ、剣も魔法も使えるレベルにはあるはずだ。一週間で、あいつはどんな状況にも対応しきる。まるで、初めからそこにいたよつに」

「適応能力が素晴らしいんですね」

「慣れが早いんだよ」

「ぶええくしょつ！」

「集中せんか、馬鹿者！」

「いでつ」

どす、と分厚い本で叩かれ、金髪に琥珀色の目を持つ彼は、後ろに立つ師匠を恨めしげに見上げた。胡座をかいしているからそうなるが、彼の師匠とて女性。立ち上がれば見下ろせた。彼女は赤髪に蒼い目、肌は健康的に小麦色に焼けている。年は二十代後半くらいに見える。背は百七十センチと女性にしては少し高い。引き締まつた体躯は、彼女の第一印象をスレンダーと位置付ける。

「よいか、ハルキ。お前の体に宿る風を操作できん限り、ワシはお前に、魔法も、剣も教えんからな」

「な、ーもー、わーつてら。俺だつて、あいつらに遅れはとりたくねえからな」

「しゃべる暇があるなら集中！」

「理不尽！？ いでつ」

二度本で殴られる。しかし彼は掴みかけていた。内なる力、その根元たる他者にして自己の存在を。

「『氷柱千本』」

唱えると同時に、三つの魔方陣が白いロープを着た晴の周りに展開する。一つは、大気中の気体、水蒸気を一気に固体、つまり氷へ昇華させる陣。また一つは、それを細い針に形成する陣。そして最後は、任意に魔力を流すことで効果を發揮し、今それは生み出した氷の針にベクトルを与えるもの。

そして、千の氷柱が最後の魔方陣に流された魔力により方向性を持ち、一体のダミー人形に全て命中する。

「『氷華』」

次に、ダミーに対して魔方陣一つが敷かれる。先に発動したのは、先の氷を溶かすもの。そして次に発動したのは、ダミーを浸す水を

凍らせるもの。しかし、ただ凍らせるだけではない。足元から、美しく儂い。氷の花が咲くのだ。全身を氷漬けにされたダニーへ、晴は一言、冷酷に呟く。

「散れ」

パン、と涼しい音が響く。あとに残つたのは、溶けるのを待つ氷解だけであつた。

術式発動の速さ、その行程、威力、美しさ。どれをとっても満点と呼べる演習に、同席したものは皆静かに拍手を送る。そんな中近づく、一人の老人。剥げた頭とは裏腹に白い髪は長く、シワだらけの顔、焦げ茶のローブを来てゐる。とこその誰かさんと同じく常に笑顔のため、好好爺の印象が強い。

「晴ちゃんの才はやはり目を見張るのう。一週間でオリジナルを作り出すとは。異世界に魔法があるとは聞かなんだが?」

「どちらかといえば、こういう物の変化についての学問があるんですよ。それは、物理学とか化学つていう学問なんですが、その知識を応用してるのでですよ」

純粹な感動と称賛を込めた一言。晴はそれに丁寧答えた。

「なるほどのう。じゃがしかし、晴ちゃんや。君は保有魔力も、扱える系統も豊富じや。これは才と呼ばずしてなんと呼ぶかえ?」

「んーと、まあそこは置いときましょつよ」

ふふ、と静かに笑う。

彼らは今、着実に力を蓄えつつあつた。全では、来る決戦のため。

そして、また三人が笑顔で再開するため。

第六話 魔法とは

彼は今、戦っている。その相手は、風を纏いし虎。西方を護りし神。名は

「白虎！」

「んだよ、つせーな。もつちょい寝かせえやハゲ！」

「は……俺のどこがハゲじゃ！ 見てみろ、この金髪！ 俺はまだピチピチの十、六、歳！ もつちよいで十七だけど、まだ十代だし！」

「あー、わかつたわかつた。んで？ 話つて？」

「力を、貸してほしい」

「あーうん、ちょい待てや」

言つて白虎は、この一面真つ白の空間のどこから紙を取りだし、爪先で何かを書いて彼 春樹に渡した。そこには、でかでかと「力」と書いてある。

「そーこれこれ、これが欲し いわけあるかアホ！ 俺が欲しい

のは白虎、お前のその強大な力だつて」

「んー、まあ合格なんじやね？ ノリツツコミができるし

「判定基準変じやね！？」

「つー話はともかく、三日三晩ずつと、ハルキは自分の精神世界漂つてきたんだろう？ どうだつた、自分の心つてえやつ」

そう、春樹は今まで、ずっと彼自信の心の中を迷つてきていた。どれだけ歩いたかもわからないほどに。最初に降り立つたのは、陰湿で薄暗い森の中。そこを抜けると、今度氷の世界。歩き進めると氷が溶けて薄くなつていた川の、その氷の膜を破つて流れ、たどり着いたのは砂漠。そして最後にありついたオアシスの水を飲んだところで、この真つ白な世界に到着と言つわけだ。

「そうだな、一口には言い切れないけど、カオスだった」

「一口に言えるしー とまあ、そうだろうな。お前は、光も知つて

りや闇も知る。熱血も冷血も知つてゐるし、乾きも潤いも知つてゐる。まあある意味、一度にあれを体験して耐え抜いたつてのは、ひとえにお前の精神力だろ。そもそも、あれを越えられないんじや俺を御することなどできないだろつわ」

「じゃあ、ここに着た時点で合格だつたと？」

「ああ、そゆこつたな」

「今の試験の意味ない！？」

「ああ、そゆこつたな」

「なんかあつさり流された！」

「ああ、そゆこつたな。やべえこれイントネーションいい！」

「ああ、そゆこつたな」

「人と一匹は、互いの目を見合わせる。

「やべえキタコレ！」

ふつ、と意識の戻る感覚が、春樹を襲う。しかしその瞬間、すぐに体の力が抜ける。が、何か柔らかいものに受け止められる。

「師匠……」

「じ苦労さん。精靈は、なんじやつた？」

「白虎でした」

「ほひ、精靈の中でも最上位の神靈、あの白虎か。どうじや、かなりのくせ者じやつたるう？」

「ありやあもう、くせ者つて域じやないつすね」

「それを手中にしたお前もな、ハルキ」

「そこいつちやいますか？」

「ふつ。まあそれより、明日からは本格的に魔法の習得じや。氣を引き締めておけよ」

「う……つす」

かくひ、と力をなくして首を横に向ける春樹。三日三晩の荒行が災いしたか、すぐに眠つてしまつたようだ。

「白虎も御する、か。あんた、とうとう夢が叶いそうだよ。あんた

からもらつた玄武は、そのためだからね

彼女は確信していた。そう遠くない未来、残りの四獸が現れると。そしてそれは、より大きな力を持つてして、この闇に侵食された世界を照らすと。

「さ、まずは魔法がどういうものかについてかの」

「お願いします」

胡座をかけて対面する一人。その部屋は昨日春樹が修行をしていた部屋だ。円形で、少し狭い。蠅燭台を六角形に置き、窓のないその部屋を六つの蠅燭が照らしていた。

「魔法とは、お前の分かりやすいように言えば、主に木火土金水の五行や火、水、土、風の四大属性、いわゆる精靈術のようなもの。それに光、闇を加えた合計八つの属性がある。」ここまで質問は？」

「一個。なんで師匠は俺たちの世界のことを知ってるんすか？」

確かに、これは不可解だつた。多少時代の遅れは感じるものの、春樹のいた世界、つまり地球についての知識がある程度ある。しかし彼女は首を小さく横に振つた。

「今気にするべきことではなかろつ。なに、時が来れば教えてやらないこともない」

「ういっす」

「では続けるぞ。まず木、火、土、金、水、風は、基礎魔術と呼ばれておる。おおよそ自然に関係するものじやから、扱いも自然の力を借りれば容易い。そして、光は浄化の役割を多く担うことから聖魔術、闇は暗黒的イメージを持つことから黒魔術と呼ぶのじや。まあ、黒魔術は必ずしも悪と言つわけではないがの。ちなみに、春樹にはこの中から、使える魔術の全てを習得してもらつ。使えるのなら、灯火程度でも火も使わせるし、大洪水を起こしたとしても水を使わせる。その覚悟で挑めよ」

「ういっす。異議なし」

「うむ、言い心がけじや。次に魔力に關してじや。これは魔法の發

動には必要不可欠なもので、この世の生けとし生けるもの全てに宿る。人もそうじゃが、動物はもちろん、植物、場合によつては石にも宿る。石に生命が宿るとは思えんが、まあ、それはこの際無視じや。そして魔法を使うにはこれの操作が必要で、より高位の魔法を使うにはこれをいかにうまく操るかが要点じや。

さらに、この魔力にはそれぞれ絶対値が存在し、それを越えられる者はそうはおらん。千年に一人、とも言われども。まあ春樹の場合、最初から魔力がその体という器に收まりきりず溢れだしどるからのう。心配はいらんから」

「んー、それを抑える術も身に付けないとなあ」

「春樹の目的は、いかに敵の背後をとるか、じゃからな。まあある程度魔法を使えるようになつたら、また教えてやらんこともない」

「ういっす。魔法つて、大体そんな感じっすか?」

「じゃな。まあ春樹のことじや、今の理屈がある程度納得して聞けたなら習得はすぐじやろ」

「俺のキーワードは納得、ですかうね」

「よし、それでは早速始めるぞ」

「ういっす!」

氣合いを入れて立ち上がる春樹と師匠。しかし彼らは後に後悔することになる。今こゝで、すぐに魔力の氣配を消す術を習得しなかつたことに。

第七話 実質勇者 ぐんじ は まほづ を つかえるよひに なつた！

魔法の説明を一通り受けた軍侍は、早速魔法の練習を始めた」とした。とは言え彼は剣を主体に戦う上、魔力の保有量は平均よりやや下回っている。そのため、火球ファイアや氷塊アイス等と言った下級魔法を重点的に、詠唱を省略して発動できるよつにといつ訓練メニューを組まれた。

「火を司りし精霊たちよ、我の願いを聞き入れたまえ。我が望むは烈火の球。燃えよ、『火球』！」

軍侍が唱え始めると彼の突き出した左手に火の粉が集まり、詠唱が終盤に差し掛かると火の玉を形成する。そして技を唱えると同時に、それが目前10メートル先のダミーに飛び、直撃、爆ぜる。

「ふむ、普通じゃな」

「老師」

軍侍の成果を見、斜め後ろから声をかける老人。それは先日、晴を褒め称えていた彼だ。彼は自分のことをゲンリュウと呼べと言つたが、軍侍は老師、晴はおじいちゃんと呼んでいる。もつとも、ゲンリュウもまんざらではないようだが。

「まあ下級魔法とは言えほんの三十分足らずで習得できるのは、並みよりは早いかのう。ま、晴ちゃんには敵わんがな」

ふおつふおつふお、と笑うこの好好爺は、どうしても憎めない。恐らく、今のは嫌みではなく単なる親バカならぬ弟子バカ発言にすぎないというのもあるからだろう。

「九重は器用ですから。確か彼女、上級魔法も徐々に手をつけてるんでしたっけ？」

「そうじゃよ。それに、中級までであれば黒魔術を除いて全て“使いこなして”おる。あれはもはや、天才というものじやろ」

「老師の弟子バカぶりと春樹ののろけ、いつたいどつちが重いんだか……」

今この場にはいない彼の「」の友を思い出し、眉を潜める。

（春樹か……。そろそろ一週間は経つが、どうしてんだろ？）

（）にいるとも知れない。しかし軍侍は、彼が今でも生きている、そしてこの世界に適応しているであろう姿をありありと思い浮かべることができていた。

（信頼、か）

「さ、軍侍ちゃんや」

「その「軍侍ちゃん」って、やめてもらえません？」

「修行の続きじや」

「訂正できないんすね」

軍侍は、この天真爛漫な好好爺に対し、ため息という些細な抵抗をするより他はなかつた。

「「「」「ブリン退治？」」

「はい。グンジ様とハルの力試し、といったところでしょうか。国王直々の討伐令です」

ここは中庭。整理された芝生と木々、そして噴水の音が心を落ち着かせる。その側で円卓を囲んで紅茶を飲みながら、アルマリアが二人にそう話した。

「マリア、その、「ブリンってどんなの？」

「えっと、背丈は大体2メートル、体色は黄緑から深緑、主に棍棒を使った集団戦をするわ。群れはおよそ三百、洞窟や岩場を住み处にするの。そして最大の特徴は、その怪力ね」

「魔法は使うのか？」

「いいえ。彼らは確かに魔力を有していますけど、その使い方はおろか、存在も知りません」

「低知能、というわけか」

「ええ。およそ犬と変わりありません。強いて言つなら、群れを意識する本能が非常に強く、また指導者の命令には絶対服従です」

「捨て駒にされても、か」

「はい。そこが、彼らを倒すときの唯一の恐怖です」「で、パーティー編成は？」

「はい、不足の事態に備え、私が同行します」

「マリアが？」

そこに疑問を抱いたのは晴だった。実際、彼女はほぼ常に軍侍にベッタリなので、晴が彼女と会い、話すとしてもなんでもない世間話ばかりだ。しかしそこを、軍侍が補足する。

「マリアも剣の腕はある。魔法もほぼ全体的に使えるからな」「まあ、晴みたいに万能ではないんだけどね」

「けどそれなら、助かるね。いついくの？」

「一週間後つてことになってるわ

「よし、じゃあ俺はそれまでに魔法を使いこなせるようになつてお

くか

「私は今使える魔法、しっかり堅めとくね」

「ではまた一週間後に」

「ああ」「うん」

ズバッ。黄緑をした人に似た巨体が袈裟に斬られ、倒れる。血を払い、刀を鞘に納める。

「流石グンジ様！ ゴブリン程度なら、十匹が集団でも引けを取らないですね！」

興奮して配置から足早に近づくアルマリアと、銀の杖を振るつて転がるゴブリンたちを土に変える晴。浄化魔法《灯籠流し》。晴のオリジナル魔法にして、昨日編み出したばかりのものだ。本来闇を浄化する光の魔法、その対象を闇から生命を奪われたものに変換したものであり、命を刈り取った者の、せめてもの弔いだ。

「マリア、ここは戦場だ。もう少し気を引き締めてくれ」「はあい

少し落ち込み気味に返すアルマリア。そのやり取りを終えたところに、晴がやって来る。

「「」の先に生体反応がいっぱいあるよ。多分、ゴブリンの巣窟だと思つ」

「探知魔法を使つたの？」

「うん。下級だからあんまり精度はよくないんだけどね」

「えー、私はそもそも使えないから、使える時点で羨ましいよ～」
皮肉のない純粋な称賛。どうにも魔法使いと言うのは、魔法に関
しては皮肉を言わないらしい。

（いや、決めつけるにはまだ早計か）

実際軍侍はまだ多くの魔法使いとの関わりはない。そう考えを打
ち消し、緊張状態を取り戻す。

「進むぞ」

「はい！」「おつけー」

軍侍、晴、アルマリアは、今苦戦を強いられていた。否、戦力的
には、まだ分がある。軍侍とアルマリアが前衛で剣を振るい、晴が
魔法でバツクアップ。この陣形は崩されない。しかし、そろそろゴ
ブリンの巣窟の前に来てから、百は倒している。それにも関わらず、
彼らは一向に退かない。それどころか、仲間が倒されても無関係、
この三人をなんとしても倒そうとしていた。そのため軍侍の魔力は
残りわずか、アルマリアは元々の体力不足が祟つて動きが鈍り、晴
も精神的消耗が激しかつた。

「九重！ 巣窟の奥はどうなつてる！？」いつちで防ぐから、少し
見てくれ！」

「わかつた！」

少し怒鳴り口調になつてゐる軍侍に、晴も声を荒げて応える。そ
れだけ、精神的に追い詰められていた。彼女は無詠唱で探知魔法『
微風』^{ブリーゼ}を使う。風の精霊と視覚を同調して、探したいところにそよ
風と言う形で精霊を送り込む魔法だ。そして、最悪の結果に目を見
張つた。

「なにこれ……！」

「どうしたの？」

表情を歪めながらも、声だけは一番落ち着いているアルマリアが訊く。

「巣の奥に、禍々しい何かがあつて、そこから大量のゴブリンが出てきてる」

「悪魔型ゴブリン！？」

「悪魔型？ なにか変わるのかつ？」

言いながら、たまたま軍侍と背中を会わせる形になり、彼は田の前に集中しながら尋ねた。

「本来のゴブリンは、魔物型と言つて一週間前に説明した特徴を有しています。けれど、悪魔型は魔王の魔力に影響された突然変異種で、ゴブリンの特徴に付け加えてかなりタフ、そして黒魔術を使います」

「もしかしてそいつらが混じったことで、まだ群れは余裕だと勘違ないしたのか」

「普通はあり得ませんが、悪魔型なら魔物型をそう操れても不思議はないです」

「苦虫を噛み潰したような顔をする軍侍。晴の言葉通りなら、いくらやつても決着がつかないからだ。

（くつそ。どうしたらしい。どうすれば、いい！）

田を忙しく動かしながら、軍侍は、打開策を編み出そうとして、編み出しきれていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2020x/>

勇者なんてお断りだ！

2011年11月15日03時26分発行